国際教師力研究会 NEWSLETTER

創刊号

2019年12月1日　No.1

国際性、多文化共生視点がある教育者へ―研究と実践のコラボレーション

東京大学大学院教育学研究科・教授　恒吉僚子

さて、昨今、「グローバル人材」「国際人」等が叫ばれ、「国際的」に対応できる児童生徒を育てることが、ますます求められています。しかし、海外滞在経験が長いなどの特別な条件がある児童生徒は別として、すべての児童生徒の基礎教育としての国際性の育成を考えるならば、教育関係者が国際性を持たなければ児童生徒に国際性を育てることは難しいのです。つまり、**"教師の国際化なくして、児童生徒の国際性は育たない"**のです。

また、日本では国際性を問う時に、語学力、とりわけ英語力に力点を置く傾向があります。さらには、英語力の判断を、既存のテストの点数に頼りすぎる傾向があるように思います。しかし、これは少なくとも二つの意味で誤っています。第一に、国際性は言語だけではなく、多様性に対する寛容性や相手の宗教や民族に対する知識、経験値等、複合的なものです。第二に、こうした国際性を伴う英語（他の言語もですが）は、国際性を上げるような経験をしながらそれを用いることによって、応用力が身についていくのだと思います。つまり、**"「生きた」経験を通してしか、真の国際性は育たない"**のです。そして、こうした「生きた」国際性の学習は、国際社会で起きている貧困、格差、環境等をめぐる課題と、日本社会の中で起きている課題とを結びつける視点につながると同時に、日本の中の多様性にも気付き、国際的な課題として見られるようになるきっかけになるのだと思います。

そうした想いを胸に、**教育者が国際貢献をしながら、教育を軸に国際性（国際教師力と呼んでいます）を上げていく仕組み作りを応援することにしました。**

今、学力や社会性、健康な身体等を総合的に育成していく「全人的」な枠組みが世界的に求められるように

私の専門は教育の国際比較、教育の比較フィールドワークです。各国の教育の研究をしながら、国際化、多文化共生への対応力の弱さが日本の教育のアキレス腱だと言ってきました。

なっています。日本の特別活動(*Tokkatsu*)は、そうした全人的な教育モデルが実際に学校で実践されている例として、様々な国で注目されつつあります。国際的には、教科と学級の話し合いを結び付ける、栄養の知識と共に、手洗い等の基本的生活習慣が徹底されているといった「ノウハウ」が求められています。それによって、単に狭義の「学力」が向上するだけでなく、民主的な話し合いを経験する、病気にかかるリスクを減らす、等の児童生徒の成長が総合的に期待されるからです。

同時に、そうした海外からのニーズに応えることで、日本の教師も文化の多様性を実感し、多民族社会における実践に触れるといった、「生きた」国際性を身に付ける経験を得ることができます。そして、最終的には、**内外の教師の相互的な学びは、児童生徒の教育に還元されるようになる**ことを期待しています。

こうした過程を記録し、分析し、また、データを提供し、内外の研究者と教師が相互補完することを通して、上記のような課題によりよく対応できていくものと思います。

恒吉僚子プロフィール
プリンストン大学大学院社会学研究科、博士号（Ph.D.）。
http://www.p.u-tokyo.ac.jp/~tsunelab/tokkatsu/

会員募集のお知らせ

https://globaledumulti.jimdofree.com/

現在、会員募集中。参加費無料です。当ホームページから、研究会にご登録ください。「国際教師力」の向上、教育の国際化を目指し、情報共有、国際発信等を行なっております。

研究会の発足にあたって

文京学院大学特任教授・子ども英語教育センター長　南部和彦

学校現場の経験を通して、これまで日本の初等教育の特徴や汎用性を国の内外に伝えてきました。世界に発信するためには、先生自身の内なる国際化が不可決と考えています。この研究会を通して日本のみならず世界に向けての社会貢献・国際貢献ができることを願っています。

「日本式教育」*Tokkatsu*が今世界の国々から高い評価を受けており、この機会を生かし日本と世界の教育における相互理解を一層深めたいという思いから本研究会を立ち上げました。

私の記憶では、今から30年程前には海外からの訪問団が小学校の学校現場に度々お見えになっていました。当初、学校見学で注目されるのは、日本の学校の特徴とされていた「規律ある集団生活や統一感のある授業」で、その根底にあるものについて問われることはありませんでした。しかし、今では給食指導や清掃指導、学級会や学校行事等の意味や意義、根底にあるものを理解して、現地化しながら自国の教育に取り入れようとされています。日本の先生方自身も気づかなかった教育活動の意味を意欲的に探ろうとされているのです。

「日本式教育」のどのような点に海外の教育者や先生方は興味や関心を抱くのでしょう。「集団」の教育力でしょうか、それとも組織化、統一化された指導なのでしょうか。実はそこに特別活動の存在があると私は思っています。特別活動は教育課程の中に位置づけられています。他国の教育課程においては同様な教育活動は教育課程の中に通常位置づけられていないと言われています。

特別活動が目指す子ども像は「思いやり、優しさ、助け合い」の心をもった子どもです。もちろん学力も大切ですが、心豊かな人間を育てることが社会を発展させ国作りにもつながります。古来、日本では教育は「国家百年の大計」と言われてきました。国づくりの基本はまさに人づくりでしょう。世界では未だ紛争の絶えない国や貧困にあえぐ発展途上の国があります。いずれの国においても、そこに暮らす人々は平和で安定した社会を望んでいるでしょう。平和の実現を担う子供の育成を目指す*Tokkatsu*に大きな期待が寄せられるのも頷けます。

この流れをスムーズにつなげ、相互交流を加速化させたい所ですが日本の学校現場には日々取り組んでいる教育活動への価値づけが十分でなかったり、コミュニケーションの手段としての英語に対する抵抗感があります。なぜ自分達の活動が海外から注目されているのか、その理由が良く分からないという意見も耳にします。これまで学校現場で受け継がれた教育技術や教育指導の価値について自覚することなく繰り返し踏襲していれば、全人的な価値があることには気づきにくかったかもしれません。よしんば理解していたとしても、他国からの訪問者に英語による説明は難しいと言わざるを得ません。小学校での英語の教科化に伴い、若い世代の先生方の登場もあり、英語への抵抗感は薄れつつあると言われていますが、相互交流のためのコミュニケーション手段としての言語レベルには十分だとは言えません。教育活動を振り返り、その意味や意義を自分自身で問い直し、可能な限り自分の思いや考えを英語で表現できるようになれば相互交流への第一歩となるでしょう。

本研究会では日本の先生方と海外の先生方が相互理解、相互交流を通して、コラボレーションする事をねらいとしています。一つの実践事例を互いに共有し、意見や質問を出し合いながらデイスカッションを行い、それぞれの国における考え方や生き方、さらには宗教や文化等の違いについても学び合います。それはまさに他では得る事のできない経験であり、やがては多様性の獲得につながります。特に日本の先生方にとってはグローバルを体得する生きた学びの場であり、先生自身の変容をももたらすと信じています。先生が変われば子どもも変わります。先生が変われば学校も変わります。この研究会が日本の先生方と海外の先生方、両者の変革の場となることを心から願っています。

南部和彦プロフィール
東京都公立小学校での校長職、全国小学校学校行事研究会元会長、文京学院大学女子中高一貫部・前校長等を経て現職へ。